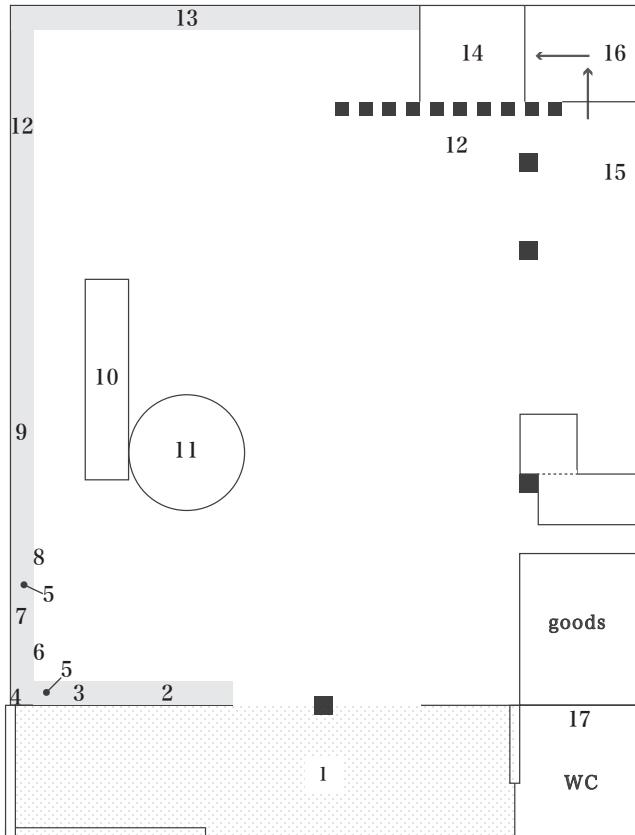


脈打つ指先

植田 佳奈 夏目 とも子 嘉 春佳

2024.4.20 (sat) - 5.6 (mon)



注意

触れられる作品と
触れられない作品があります。
会場のスタッフにお気軽にお尋ねください。



ギャラリー HP・SNS

かつて織物業を営んでいた頃の蔵を1997年にギャラリーに改装し、四半世紀が経ちます。この間レンタルスペースとして多くの方に利用され、昨夏新たに改装。今後も、レンタルスペースとしての役割はそのままに、ギャラリーがその時々大切だと思う事柄に焦点を当て、様々な企画を展開していきます。

本展はリニューアル後初の企画展として、質感と記憶をテーマに、陶作家の植田佳奈、美術家の夏目とも子、嘉春佳、そしてあなたと〈つくる〉展覧会です。上滑りする知識や言葉の前に何があるのか。自分の感覚器官を開いて委ねて身がさねする。脈打つという身体的感受性は、青白く光る液晶で踊る指先に何を示唆するか。

未規定でやわやわとしたもの
粒々の蚊柱みたいな存在
小さいけれど、弱いけれど、そうじゃないもの
いつまでもそこに佇んでいられること
ふれることで知ること
ふれられないから知れること
瞼の奥で感じる色
こぼれたもの、落としたもの
もう無いこと

現代美術にまつわる様々な踏まえるべき文脈を問う前に、私たちは何の前に立っているのか。難しい言葉は一旦置いて、私やあなたの目の前にある作品“を目で触れ、手で見るようにお楽しみいただけましたら幸いです。

ツインギャラリー蔵 空閑美帆

参加型作品

1

探す、刻む、包みこむ
ギャラリーの壁をつくろう
ギャラリー蔵 × 夏目とも子
2024
ペンキ・パテ

2

ギャラリー蔵 サンルームの光
2024
ペンキ・パテ
夏目とも子

3

ギャラリー蔵 壁のシミ
2024
ペンキ・パテ
夏目とも子

4

鴨江の壁 204号室 (残存一部)
2016
ペンキ・パテ
夏目とも子

5

流されてゆこう
2024
トレーシングペーパー・クレヨン・パラフィン・チラシ・ペンキ・パテ
夏目とも子

6

黄色あるいは青の
2024
羊毛・亀甲金網
夏目とも子

7

彫刻と絵 色の行方
2024
クレヨン・パラフィン・紙ヤスリ・画用紙
夏目とも子

8

石を包む
2024
羊毛・ギャラリー蔵の石
夏目とも子

9

＊
2024
陶
植田佳奈

10

呉須染、陶衣、陶片練り込み
2024
陶
植田佳奈

11

岩、岩+棒、岩+棒+棒、岩+球
2024
陶
植田佳奈

12

手の跡をたどる
2024
古着、刺繍糸、木材、蜜蝋、オイル etc
嘉春佳

13

ギャラリー蔵 2024 サンルームの記憶
2024
ペンキ・パテ
夏目とも子

14

象嵌一輪挿し
2023
陶
植田佳奈

15

流れ出す色と未来へ
2024
金属板・クレヨン・パラフィン
夏目とも子

16

継ぐ、しがみつく色
2024
母陽子作 トタン板・腐食剤・油絵具/娘とも子作 塩化ビニルシート・クレヨン・パラフィン・アルミ針金
夏目とも子

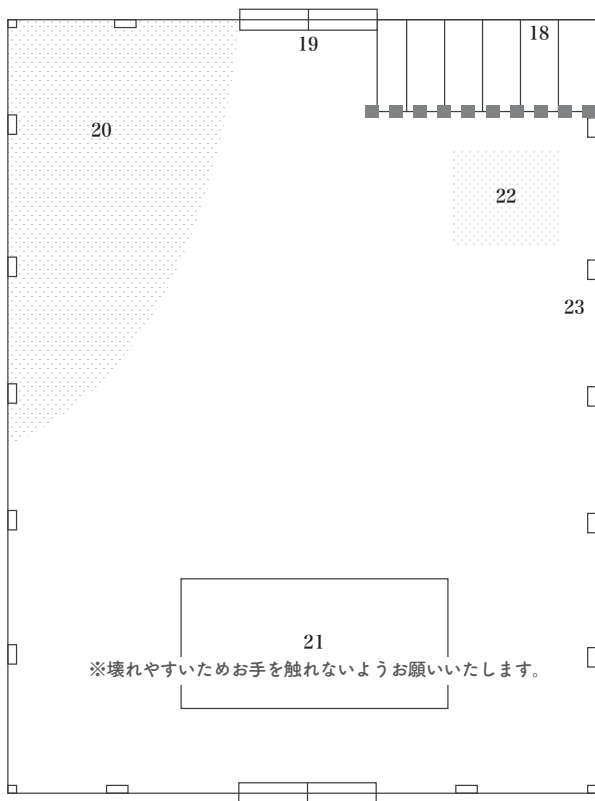
17

傷と風
2024
ペンキ・パテ
夏目とも子



撮影可

SNSに掲載する際は、#をつけて頂けると嬉しいです
#ツインギャラリー蔵



2階は自然光で鑑賞します。足元に気をつけてご鑑賞ください。

均一で人工的な光源の下ではなく、日々刻々と変化しコントロールできない光源の下にある作品、そしてそれを見る私やあなたの所作は、物事の核となる部分を柔らかく照らします。

18
ビリりと破ればいい

2024

ペンキ・パテ・ギャラリー蔵の壁紙・クレヨン・パラフィン

夏目 とも子

19

小さき黄色をどうぞ

2024

クレヨン・パラフィン・テグス

夏目 とも子

20

遊ぼうよ

2024

クレヨン・パラフィン・テグス・アクリル板・羊毛・金網・塩化ビニルシート・ギャラリーの石

夏目 とも子

21

Spring Letters from Where I Live

2024

刺繍糸、印画紙、蜜蝋、オイル、野草、祖母のお茶の道具

嘉 春佳

22

感覚の浜辺

2024

漂流物、陶

植田 佳奈

23

Hint

2024

植田 佳奈

植田 佳奈

Kana Ueda



SNS

夏目 とも子

Tomoko Natsume



HP

嘉 春佳

Haruka Yoshi



HP

制作中に起こる様々な現象（例えば乾燥時のヒビ割れや顔料の垂れた跡など意図しなかったもの）を用いて作品を制作している。完成イメージはなく、制作中に次の作品の手法が決まってくる。そうして完成したものは自分の中の浜辺のような場所から拾い集めてきたものなのだと思う。2階の展示作品は旅先や工房で実際に拾ったものを並べた。もう一つの自分の浜辺も自分の視点や感覚が浮かび上がって見えてくる。

この蔵の壁は土、木板、トタン、壁紙、塗料と時代によって様々な材料で出来ていました。変化し続ける建物の表層と、そこで生活を刻む人の時間を想像して色を形にしてゆきました。私の母は絵描きで、油絵具の匂いと絵具で汚れた壁を見て育ちました。蔵の中にいる四代の女性達に接するうち、母の作品に登場してもらおうと初めて思いました。今回使用した色材は三つ、クレヨンは動く色、羊毛は包む色、ペンキは固定する色でした。

亡くなった祖母が残した絵手紙を元に、筆跡をなぞり、縫い留めるうちに、季節の発見を描いたものが多いことに気がつきました。制作中外に出ると、思いがけなく足元に花が咲いていて、祖母もこうして春の訪れを感じていたのかもしれないと思いました。2階の作品では、自分が暮らす街で見つけた春の様子を、蜜蝋のオブジェや刺繍によって形に起こすことを試みました。

略歴

1992年神奈川県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科陶磁専攻卒業。
主な展示に、個展『Metaphysicallandscape/形而上学的風景』(2023/nostos books)、『Sense of touch』(2023/SIRI SIRI Shop)、『植田佳奈 個展』(2023/Rohan)、『excavation sign』(2022/green thanks supply)、『Found Shapes』(2022/doinel)、『utopia』(2022/shop ULU)、『depends on your hand』(2021/CIBONE CASE)、『CARVE OUT』(2020/green thanks supply)、グループ展『頁の海に潜る』(2023/LOG、GALLERY MERROW)、『手仕事のさきへ9』(2023/日東堂)その他多数。

小さな電気窯で用途のない焼き物を制作している。作為の中に無作為を含ませた制作方法を用いて、人工と自然の間を探る。失敗とも思えるような偶然入ったヒビや割れなどを技法として取り入れられたり、数日間かけて土の表面に点を打ち続けることによって自然物のような肌理を作り出している。土や釉薬での実験を繰り返して、陶芸での新たな質感表現も試みている。

略歴

1971年兵庫県生まれ。静岡県浜松市在住。筑波大学大学院芸術研究科修了(総合造形コース)。
主な展示に、滞在制作『フリースクールびへだの壁』(2023)、『遠州横須賀街道ちっちゃな文化展』(2023/掛川市横須賀地区)、『HERE AND NOW 浜松市鴨江アートセンターアーティスト・イン・レジデンス展2014-2021』(2022/浜松市鴨江アートセンター)、アートコレクティブ kihakka『すくう、こぼれる』展(2021/みかわや|コトバコ)、個展『鴨江の壁 2017 ロビー / 行き交う場所』(2018/鴨江アートセンター)、『鴨江の壁 204号室』(2016/同所レジデンス制作)、ワークショップ『探す、刻む、彫りおこす』(2022/鴨江アートセンター)その他多数。

その場所にかつてあった役割や人の暮らし、日差しや風雨、積み重ねた時間の記憶へ想像を馳せ、色材を幾層にも重ねる行為を通して、目の前に迫る「今」を考える作品を制作。既存建築物の壁を使った現地制作や、主にインスタレーションの手法を使い表現活動が続ける。

略歴

1996年茨城県生まれ。筑波大学芸術専門学群総合造形領域卒業。東京藝術大学先端芸術表現科修了。
主な展示に、『TOKYO mosaipue』(2024/KAWANO)、『奥能登国際芸術祭』(2023/旧上黒丸小中学校)、『中之条ビエンナーレ』(2023/伊参スタジオ)、『テラスアート』(2022/テラスモール湘南)、『SHIBUYA STYLE vol.15』(2021/西武渋谷)、『中之条ビエンナーレ』(2021/やませ)、『Denchu Lab. 2019』(2020/旧平岡田中邸)、個展『ある日のことを呼ぶ』(2020/ビエントアーツギャラリー)、『脈が生まれる場所』(2018/スタジオ S)、『Someone I'll Never Know』(2017/スウェーデン王立美術大学)その他多数。

記録に残らず消えていく自分や他者の日常的な時間や記憶を形にすることを考え、主に古着を用いて制作している。縫う・編むといった手仕事がかつては衣服の修繕や道具を捨てるための術であり、暮らしを継続させること・ものを残していくことと深く結びついていたという点に着目し、古着を収集し、手仕事によって再構成する方法での制作を行う。